

911.3

1
下

古事記

下

御
文
庫
五
四

一



流川の曲を今ま雅堂はやうに書
の筆跡不活字をかくしてあるが、
活字の端とまじりてやうすに見
る。活字の字形はやうすに見
てもうなじでかくらへる。まことに
筆跡がやうすく見え

筆跡のやうに見える

つれさ

彷川集

卷之二

西

佐多の邊にアモルト
シハトボロの多い一山
主がアリ佐多ノ山、佐多ノ
山の名石、古事記
千松、季由
アタカヤキモニヒナキ
牛馬
山のもの文子、山の
毛原
去年もアモルト、佐多ノ
山の事

雅室を拂ひて坐りて書ひり
あすかへゆるに日の匂
れどもひかへまつまつ
みほくのとれどもくらみ
もうちかへ集ひてお
せし御子す事はト如
ひの君の御子す事は
すまつたとてはあ
梨

きく行ときくまよの虫
秋迦の御店とくつこと
種と捨とくふとゆく
ひよ書よが一月上
きくのとくのとくのとく
わねの所と御家とく風
まよのとくのとくのとく

梨

卷之二

種の事も知る。自の度有り
もは月の事も知らぬ。かくか
ちもしく掃除する。床下に
泊まや面のそれも。多くもさ
う。アシタハナリ。初めに
水を浴びた。引は是を頭にね
千枚。鬼の如きがれ。序
書も。おのとの面がまぶ
る。

空きなし解せぬ。シテ
ウタ歌やアシタハナリ。多
久日ヤ。道へ。うそとまのゆき
古序や。此は。は。湯。と
おの。の。う。アシタハナリ。ど
せ

久禮

三月廿日改定

まはくとへり

まわらふとへりとすの手

経年

ちよよの雪やちくまを

黑雨

さくへくす柳らう門朴
守れ柳すきくわ樹ゆうて枝兄
えひむらそくせかうり傳

ナ

退て居ゆる代えらゆる所

而

かよエツ自ト區ものをと

而

筆ヤヨシホあすめかづけし

杜

中・ね・全・よ・く・い・か・い

也

スリの仕事すじにかづけ

松

井・ま・い・あ・く・の・ま・す

木

ゆ・く・く・く・く・く・く・く

松

まわらふとへるのまゝ神

山陽

二

まよひておゆゆくよむ

あまくちあまくちあまくちとを
鳥居

井戸手に立てど居ゆきぬれぬ

卷之三

貢をうながすの仕事とおもふて

卷之三

卷之三

樂府一卷

卷之三

中華書局影印

卷之三

卷之三

卷之三

2
S. J. G. S.

卷之三

陳元

卷之三

吉田の事はあらうとおもふ
江原の事はあらうとおもふ

を詠詩とすが、其の事はやうに此處に
うへて、今後も必ず其の事はやうに此處に
あらわす。かくして、其の事はやうに此處に

加之今者多有之矣

經
序

君は仕事のための自己を、
君は仕事のための自己を、
君は仕事のための自己を、

暮れてハシカヒトナシテル

萬にミタニト相のをす

アラシテモアシテアラシテ

此の事は必ず秋の事
仲冬より而ち中旬より升
立古人を可也 唐の之を

下田宿

右ナリハ多ホアアヌシテ
ニキニシテモトコトヘモアヤニ
アツシムシテシムシテシムシテ
ルナシテシテシテシテシテシテシテ

セイナリ ハシタリ リリ リリ

経年

セイナリ ハシタリ リリ リリ

左限

セイナリ ハシタリ リリ リリ

仙居

竹子と見ゆる

竹也

あり事にて子からひてあつ

ワテ
節とよりて計へ一計

京斗

あはせり身家よりてましむし

主潤

たかめやうに新めばあく

牛森

解へよみがえりてゆきとら

牛柏

通へりすもしらけすらふ

左掌

アキラホガタヒタマツ

右掌

二

新りのあひは年りき
進ひ事れ近便よし物をも
渡すやうりシワ本松
山櫻の花のうす、もとほん
さくわくわく、酒の近く
うべえくと月是處のほれと
まくまくやれやおまの所これ

牛

ニカ相りりすりて見

まくととのまくわらふと字

代わるがた事のれん

柳

名深

ゆく柳やまくすすむに
すくせんやまくすすむに
まくすすむに

仙翁

望みましむ金平人たま
かとむじほのまく山まのま
まくすれ竹をあわせやまく
浦もじひ掛てまくすなまく
まくまの角をやまくすなまく
まくまくまくまくまくまく
間やまくすなまくまくまく

旅宿やあすかひりまく
ソノリセヤシムトナシテキサシ
來秋やあよそ遠きくま
黒

中村

旅宿に仕事仕事あるお茶をうそ
うそうそもまじめのうそもまじめ
冬日がそれからまじめのうそも
まじめまじめわざわざまじめ

まよせやまの陽のむきのまよ

経より

己巳

まよせやまの陽のむきのまよ
自ゆきのまよち一翁
丁寧の届きのまよくわく
たまのまよくわくの年
経

三

卷之二

卷之二

九月一記

子混

萬葉集に詠じかねておもひだれ

而の序を以て此處

卷之三

までも多くあつた清方主機

卷之三

卷之三

卷之三

新調の長流をも様子
とてりに腰と汗の体筋
うかく多くうへてはまうと
年と育れひりとむねと
何事とよ向つゝとまよお年
氣のやうな今れぬる年
もしむと連ひての年と年と
活膚

おまえもお猿がそれなりの事
仕の批文と申す
志をもつてゐるに仕度
をつくらうとおもひたので中
華

名
錄

すすめの山かみやまきよの子
アシキヤねうゑのうなれはく
木の月やすまうるまくはとく
空あ
等へきやもあらわしのうの空
風かやりくの風
等へ
峰の極^{タマツ}をつゝ
西メ女
斐翁
名古アカムヒ御^ミ山と山
斐翁

まかまく 除々 重りうる 嘴子 已矣
とすとすと 九使す まの内すれど 一在

追加

おはりおは

おおやあようち、まつて 次一役
おもむきゆきとおひで おまつね佐佐木内 ほね
おやい、くとおせやと あお山白山 管絃
いかれぬのまろな たゞ日向 文羊

中村の連中

四五海のまろとこと しりの子、おは
あさくと奥ふくろとと 伸せ額
まよまよとおせやと 郎りてし
おもとよとよとよとよとよとよとよと

下はすうとおはりととくの紫燈
とすとすととすとすとすとすと

おはりおはりのまろとく

御身の御心へ乞ひ申す

テイサウ

まの御身サニ國のヤマトノ御家
事の御身シテ御身の御身モ申す

おとて御身の御身モ申す

御身の御身モ申す

序中ノ御身の御身モ申す

おとて御身の御身モ申す

室 陽

おとて御身の御身モ申す

五
七
九
十一
十三
十五
十七
十九
二十一
二十三
二十五
二十七
二十九
三十

「アーヴィングの死」

十一

游九山

卷之三

又得此也之極了松尾

津豫

中
山

歌をうたふ事はあつて
風情人かくにゆき人をあつて
玉二郎もさう医者と歌ふて

主の御心をうかがひて、おもむろに御心を改められました。

卷之三

水一合にあらそひあつたのれ

音也

はなはなとまくはなはなと
はなはなとまくはなはなと

はなはなとまくはなはなと

音也

はなはなとまくはなはなと

ね山

はなはなとまくはなはなと
はなはなとまくはなはなと

はなはなとまくはなはなと

はなはなとまくはなはなと

はなはなとまくはなはなと

はなはなとまくはなはなと

はなはなとまくはなはなと

まくらの下に置かれてゐるところ
からてこゝをもりと汝
タモリの喜び事によひて
左川
杜律よりはなれぬ詩と並べられ
芦牛
小僧よりもむかしす折ゆ一 胜搞
ああよのまよとあくまされと
観音
きくしやくす 甫 一 うやま か

海家より書来、経の種名
ワタケシヨウノハシガタヒ
タモリの喜び事によひて
喜慶
まくらの下に置かれて
至左
左川の喜び事によひて
喜慶
武田
武田アリ日く
喜慶
喜慶

中へと桂の脚で下るを 有
あつて道とまたもちあつ
てあいへまわらむのせひまく
ひとも強ひてやう月の借 挑手

名録

まへりてすまへりてまへりて まへりて
まへりてまへりてまへりて まへりて

葉うれして手はりり かじ作
延からりりかう物のちかひト 下流
のさとのほやかくゆくよもくふ 疊
わ一かはせて まよはまよ 左肩
四五六歩まきよ段ア外 有
きの枝、葉をかみしめてみほ
まくまくよそすも枯れま
熟まくまくよそすも枯れま

三ノノリ等や四千、家の所、豊
多あやまが御まよかとれど、豊

折了局事あるもまよひす
無力の様ゆうじんと表て其事之士
一箇もあつれり

松櫻(マツヨシ)の御年(マツヨシノミツ)

秋草(アキコトコロ)の御年(アキコトコロノミツ)

吉田(ヨシタ)の御年(ヨシタノミツ)
ノホラ(ノホラ)の御年(ノホラノミツ)

ノホラ(ノホラ)の御年(ノホラノミツ)

三ノノリ(ミツノリ)の御年(ミツノリノミツ)
大(オカ)の御年(オカノミツ)

小(オカ)の御年(オカノミツ)

文(モリ)

山野に一草の生れも無事處へ
折や束へと歸りてから
包みてはるゝ一日の事也
また草のうへり凡
草のうへりと草のうへり集
取ふあらうと草のうへり
あらうと草のうへり
白髮

體の様もあらま 呼名

准子の経本十九冊

後と決して手を離さない

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

健氣もじめりよのまへる爲子
カナシヤ酒の味わひや、酒
ほの火を連して、火や冬の月
高きやゆゑの振舞、振舞鹽
お酒、酒はかくの風風
まぐらがおもむく、おもむく新牧
新牧新牧とおもむく、おもむく新牧

風子

お山よりちくのちくのあすこでまわる
まよひにしきむかゆく、おまちあはせら
まよひにしきむかゆく、おまちあはせら
まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら
まよひにしきむかゆく、おまちあはせら
まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

まよひにしきむかゆく、おまちあはせら

此一卷之文皆出其手
其子曰子思

アリヤーの先駆者トニシキ
モチムラナシシテモカムル
ムニシムニシカムル
アヤシキ事ツハシキ也
アタマノシキ事ツハシキ也
アタマノシキ事ツハシキ也

今まくは御心よりの事は皆ひ人合
せらるる事多きとおもひまちひ
様の下へおひりをもめゆる
御刀を手に取る事
かうそも御下されりて御ては
身をもめゆる事
御事も御事の如くとおもひし
事

諸君の御心に御心を以て
石

まわるよの石くらへうさぎも

風流やうに、ゆきの新月とて

偏よ柳の枝をうさぎをねる

りみかゑや絶壁の空そよが

九りふねよす

巴

讀 改

金星はまくとあらわし

かまくとまくと行のうとやまのふ

版ノ山

行け、みどりうす風ひよ

金文

多聞大丈のまへりふる代
亦智の猿、皆わく、
めのぐらむとぞれもまこと
す。本ルとあはれのう
想様がまし、遠くのまきを
りとせん、腰のまきを
ゆくやうにゆくやうにゆくやうに
十里、七里を走る。車

連てかひのむをされかと
人ぬまきよもあらうる
かくはくの月のすれや
わざのまかづく
おのれのまほせん
うせきをせまのけどもあ
至畢
一泉

名
錄

ニ里も高きをかどるまゝか
林の音國の風物をかくす

三首

しのむる音をかくす
高きをかくす
かたよ行國をかくす
居坐りをかくす
至りぬるをかくす
あらと桃を

かくすや國のかくす
かくすや國のかくす

かくすや國のかくす

琴之

西雅御國

車中

自の車中かくす
かくすとみれ
車中
かくす下車す
かくすとみれ
車中

かくすとみれ

孤絶

卷之三

詩
序

卷之三

志士仁人之義氣也

日記轉全文 “ ” 東京
年月日 原稿用紙

وَمُؤْمِنٌ بِهِ مُؤْمِنٌ بِهِ مُؤْمِنٌ بِهِ مُؤْمِنٌ بِهِ

۱۰۷

1 ~~the~~ ~~of~~ ~~the~~ ~~the~~ ~~the~~ ~~the~~ ~~the~~ ~~the~~ ~~the~~

Chaperon et compagnie 118

之子也。其子曰七

Mr. T. H. Hovey's
Journal of Travel

Thomomys talpoides 木里

187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200

すとくわたりてやまじもとま
男のまかと祖母のまか
降り船すとくわたりてやま
こうゆひまくとまえまか
山

ア
あまのは連ひつまく
漸と年長のかまきり、お
むかへるよしれどけん
ひよしよしもふいもたれや
ま

而止て御ゆめやお構

名録

り際やよしはるかに
つまらぬあやさまよせよ
うの向ふゆくもえの月、竹笙
笛かなへゆきむちほのく 左手
きのよひあかすらうるみ
鼓まや瑞れなむもの銀、白音
と自ら拂ひておもひへ 第二
階のうねうねふらはる 山市

ひまむかわせをあらめ 素戔スミヤシと大オシ郎
ひめうらゆまととめ ひ富、志母

夢醒生ムカヒタケルを難うすと
因縁ウケンのすゑが身を

已むじはるやとあひの夢の晴

三、章

はるかに
おもひがまく又
おもひる

木、質

樂する事のへてね葉の事のへてね葉の事のへて

是ふ

そりよのやうに人か雲
のゆゆほひゆよお活の事のへて
はくあける事のへてゆきを
せとりよのへてすたまつるの
えきよしきのふのふのふの
ゆれ

自らすらあるはれは

まといひゆり又おもひる

まよひゆり又のゆりてねう

本は

文庫

海原を人手へせり行ふ
このへやきのまへりてまふる
一ゆゑのやうとよしむるも
ちふねとよしむるひくもじふ
おれにゆゑを折と折と敵
もかがへ主と接へたまふ
わ

すまのせやまざりを 仲を 云協
ひやまの御風のあともるな か

あそぶをなほのあくせまつて ち
代よのいをかづまへるも せ
ウ りゆえしてあふるありと自のれ
とまう。ちやへるもとちと 文房
小説にひれゆるくあれか
角のゆめのまやまくまく
ハよまくゆるを おもふれ
わ

アラシニシタリトモのセレレレ
サヌ

折々近常も御さん

大吉

一時アラシと熱もひくらん

まじか原のアキモ

松

タクルのタホンシテシテ

ア

席アラシとふほのちや

席

アラシと並のアラシハシマ
ツカエ

宿アラシとアラシハシマ

宿

アラシのアホアホアホアホ

店

山アラシアラシアラシアラシ

アラシアラシアラシアラシ

アラシアラシアラシアラシ

アラシアラシアラシアラシ

アラシアラシアラシアラシ

豆

おこやほれくわらひ事

ゆうすむちよてあはるの自然

ちゆねのじゆうゆにもし

まきかくとまきかくと

みせやんわしれか慶

かくとまきかくと

かくとまきかくとまきかくと

みせやまとか山のまきかくと

可也

おきづりやまくとまきかくとまきかくと

まきかくとまきかくと

おきづりやまくとまきかくとまきかくと

詠金下

詠金下

巨姫

京 郡

おの人のゆかりの御事

おの人のゆかりの御事

御事の御事の御事の御事の御事

文支

おの人のゆかりの御事の御事の御事

おの人のゆかりの御事の御事の御事

おの人のゆかりの御事の御事の御事

文支

ラ

おの人のゆかりの御事の御事の御事

おの人のゆかりの御事の御事の御事

文支

あらうとあかねもひまくお
あめやかなうへ、あめや
ひなたもあれしゆとまへ一色
お子
作さるのほりゆくかは
あねやまひますむれし
風
煙草のよき所を五ひじ
玉里
給ひまがたと自のひ
葛屋
あはせにまづく

名
錄

東坡先生集卷之三

ひのきの木の下にうらう。まよひ

櫻

うるみの石にうらう。まよひ

菖

まほくの木の下にうらう。まよひ

柏

源(かわ)あくやまうわくねてまよひ

柏

あくやまうわくねてまよひ

柏

まほくの木の下にうらう。まよひ

柏

百里

身はもとよりいたる所
に又は島せよまへり也
山人よむよのまへど
くわや風そよぐ行ふく
さりへもあまきに因うて
馬は車へとましれお
草はいりやうすまくまく
紅葉

歌はるひの第一覺
いと一師をよみ
極めか爲りてか
ひとつもひのうか
可也

蕉つ書母

福至治書母





